

情報解禁 | 2023 年 11 月 6 日 (月) 13 時 30 分

2023 年 11 月 06 日

2024 年春 初開催！ 青森県内 5 つの美術館・アートセンターによるアートフェス  
各館の展覧会・プロジェクトの概要を発表 第一弾！

## 開催概要のご案内

# AOMORI GOKAN アートフェス 2024

—つらなりのはらっぱ—

2024 年 4 月 13 日(土) — 9 月 1 日(日)

この度、青森県内にある現代美術を楽しむ 5 つの美術館・アートセンター（青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館）を中心に 2024 年 4 月 13 日(土) から 9 月 1 日(日)まで「AOMORI GOKAN アートフェス」を初開催します。2020 年よりこれら 5 館が連携し、県民や観光客が青森のアート体験と共に、地域の周遊を喚起する「5 館が五感を刺激する—AOMORI GOKAN」プロジェクトを発信してきましたが、いよいよそれぞれの館の特徴を活かした多様なプログラムを企画する新しい形のアートフェスが始動します。最大の特徴は展覧会やプロジェクト、パフォーマンスなど、この地に根差して活動する各館のキュレーターが協働で実施するもので、2024 年度のテーマは「つらなりのはらっぱ」に決定。アートを起点に県内各地域にある自然や食、建築など豊かな文化に触れることを通じて、青森の魅力を発見する機会となります。

### <2024 年度テーマ「つらなりのはらっぱ」について>

「はらっぱ」と聞いて思い浮かべる風景は人それぞれ違うように、青森には「はらっぱ」にたとえられる、個性豊かな 5 つの現代美術を扱う館が揃っています。「はらっぱ」は目的をもって行くところではなく、訪れることでなにかに出会い、なにかが起る、特別だけれど日常とも地続きの場所です。そこは、訪れては去っていく人間、動物、植物などの訪問者たちが関係する境界上に位置し、日々思い思いの活動が繰り広げられる場とも言えます。本テーマには、5 つの美術館やアートセンターがまさに「はらっぱ」のように機能し、それぞれの個性的な活動のつらなりから新たな関係性が紡がれていくようにとの願いが込められています。5 館それぞれの「つらなりのはらっぱ」をとおして、これまでにない風景がいま、ここに立ち上がることを目指します。

## 本アートフェスの特徴

### ■新しい文化芸術ネットワークの在り方を探るアートフェス

本アートフェスではディレクターを置かず、5館の学芸員が集まって議論を重ね、コンセプトやテーマを練りあげていきました。これは新しい文化芸術ネットワークの在り方を探り、青森県の文化的多様性とその魅力を伝えていく試みとなります。

### ■5館の個性を接続させることで浮かび上がる 2024 年度「つらなりのはらっぱ」というテーマ

5館は青森市、弘前市、十和田市、八戸市にそれぞれ点在し、文化圏や都市機能の異なる地域で、それぞれ個性的な活動を行っています。本フェスはそれら5館がゆるやかにつながり、その効果を県全域に波及させていくことを目指した「芸術文化体験+観光」プロジェクトで、今年度のテーマは「つらなりのはらっぱ」。各館の特徴を活かした展覧会の開催と、連携のシンボルとなるような作品の設置も行います。

### ■子どもたちが楽しく、アートに触れられる、5館共通のラーニング・プログラム

各館の展示やプロジェクトをより深く楽しむための、子どもや親子を対象とした様々なラーニング・プログラムを5館が連携して開催します。5館をめぐり、その「つらなり」を体感できるプログラムです。

### ■青森県内の多彩な魅力を5つの美術館、アートセンターを軸に体験する周遊プラン

本州最北端に位置し、三方を海に囲まれた青森県は地域により気候や風土が異なり多彩な伝統、自然、食文化に恵まれています。アートフェスでは、その魅力を再発見してもらうことを目的に、工芸、建築、自然などをテーマに周遊コースを設定。国内外からの観光客、また県民や周辺地域に在住の方に向けてアートを通じた新しい体験を提案します。

## 各館の展覧会・プロジェクト | 青森県立美術館

## かさなりとまじわり

会期	前期：2024年4月13日（土）－6月23日（日） 後期：2024年7月6日（土）－9月29日（日）
会場	青森県立美術館 地下1階展示室、コミュニティギャラリー、ワークショップエリア、屋外ヤード
開館時間	9:30～17:00（入館は16:30まで）
休み	第2・第4月曜日および5月14日（火）、15日（水）、6月24日（月）～7月5日（金）
参加作家	原口典之、吉田克朗、他



青森県立美術館を設計した青木淳氏が提唱した「原っぱ」論を援用し、展示室のみならず、コミュニティギャラリーやワークショップエリア、屋外ヤードなども展示やプロジェクトに活用。展示室を含めた諸室をそれぞれの「原っぱ」に見立て、館内外の至るところでアートを発見、鑑賞、体験できる場を設けることで、美術館全体に大きな「つらなり」を生み出していきます。「展示室で展覧会を見て、ショップやカフェに立ち寄って帰る」だけでなく、県立美術館というひとつの街を自由に散策しながら、建築×アートの魅力を美術館全体から体感いただけます。

テーマは「かさなりとまじわり」。美術館を構成する特徴的な各空間が「かさなり」、いくつかのコンセプトに沿って作品がインストールされることで、青森の自然と人間の「まじわり」、死んだものと生きているものの「まじわり」、現代社会のありようとこれから未来を切り拓いていく人たちとの「まじわり」の諸相を浮かび上がらせていきます。

三内丸山遺跡に着想を得た美術館の施設内外を往還しながら、縄文からつらなる長い時間の中で堆積してきた青森の文化芸術のエネルギーを引き出し、豊かな青い森の生態系のように展示空間を連鎖、循環させることで、未来を切り開くための新しい活力を美術館全体に充満させる試みです。

左) 参考図版 吉田克朗 《work 9》 1970年 ユミコチバアソシエイツ蔵

右) 参考図版 原口典之 《F-8E CRUSADER》（「十字路口-CROSSROAD」ART BASE 百島広島での展示風景）  
2014年 ©ART BASE MOMOSHIMA

## 各館の展覧会・プロジェクト | 青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]

## currents / undercurrents

### —いま、めくるめく流れは出会って

会期	前期：2024年4月13日（土）－6月30日（日） 後期：2024年7月13日（土）－9月29日（日）
会場	国際芸術センター青森 ギャラリーA・B
開館時間	10:00～18:00
休み	会期中は休み無し
参加作家	青野文昭、Jumana Emil Abboud（ジュマナ・エミル・アブード）、岩根愛、是恒さくら、 光岡幸一、中嶋幸治、鈴木正治、Jasmine Togo-Brisby（ジャスミン・トゴ＝ブリスビー）、 Robin White（ロビン・ホワイト）ほか
会場構成	山川陸



岩根愛 《The Opening》 2022年

国際芸術センター青森[ACAC]は、表現活動を行う人々が全世界から集い、宿泊しながら地域住民や学生らと交流し、滞在制作を行うアートセンターです。

表現者たちは偶然や必然に導かれながら移動し、この青森という土地／場所へやってきます。古代からヒトをはじめとした生き物は、自然の力も借りながら、移動を続けることで生きてきました。生まれた場所、定住する場所、前にいた場所、そしてこれから行く場所は、今たまたま現在地であるここ青森と、どのようにかかわり合うのでしょうか。そして、様々な場所の自然や人間、非人間たちといった存在、

そして歴史や記憶と私たちは、いかに交差しつつ、語り合い、とらえ直しながら生きていくことが可能なのでしょうか。

本展では、「現在」という意味をもちながら、海流や気流をはじめとして、ある一定の方向に動く水や空気、電流などの変わり続ける流れを示す「current」と、表面や他の流れの下にある目に見え難い流れや暗示を意味する「undercurrent」をキーワードとして、ある場所とかかわり合いながら表現をつむぎ出す国内外のアーティスト、そして青森ゆかりの表現者たちによる作品が集います。前期と後期の出展作家は同じですが、会期半ばで展示替え

をし、異なる2つの展覧会を行うことで、一回限りでない場所への働きかけや、変化し続ける「いま」をこの場に取り込むことを試みます。それぞれの表現が発生させる流れや渦のようなものが、出会い交差することで、また新たな流れや渦を無数に生成させていく…実験的なアプローチを通して、私たちの現在地を問う企画です。

青野文昭 《ここにいないものたちのための群像 - 何処から来て何処へ行くのか - サイノカワラ 2016》  
2014 - 2016年



## 各館の展覧会・プロジェクト | 弘前れんが倉庫美術館

- ① 蜷川実花展 with EiM : <sup>はかな</sup> 儚くも <sup>きら</sup> 煌めく境界
- ② 弘前エクステンジ #06 「<sup>しらかみのぞきみこう</sup> 白神観見考」

会期	2024年4月6日(土) - 9月1日(日)
会場	①弘前れんが倉庫美術館 ②弘前れんが倉庫美術館、HIROSAKI ORANDO、 ギャラリーまんなか、他
開館時間	9:00~17:00 (入館は16:30まで) ※館外展示の開館時間は未定
休み	火曜日 ※ただし4月23日(火)・30日(火)、 8月6日(火)は開館
参加作家	①蜷川実花 with EiM [Eternity in a Moment] ②狩野哲郎、佐藤朋子、永沢碧衣



参考図版 蜷川実花《Untitled》2022年  
©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

弘前れんが倉庫美術館では展覧会とリサーチ・プロジェクトを実施します。展覧会「蜷川実花展 with EiM : 儚くも煌めく境界」は、写真家・映画監督の蜷川実花が、データサイエンティストの宮田裕章、セットデザイナーのEnzo、クリエイティブディレクターの桑名功らと結成したクリエイティブチーム・EiMとの協働により実現する大規模な個展です。うつろう時間やながれゆく季節の境界を超える壮大なインスタレーションを発表するほか、蜷川がコロナ禍の弘前をはじめ、日本各地で撮影した桜の写真など、初公開の作品を含む近作により構成します。

弘前エクステンジ #06 「白神観見考(しらかみのぞきみこう)」は、青森県南西部に位置し、弘前市を含む津軽平野を流れる岩木川の源流の地でもある白神山地をテーマに実施するリサーチ・プロジェクトです。狩野哲郎、佐藤朋子、永沢碧衣の3名のアーティストたちが、それぞれの視点で、作品展示をはじめ、ワークショップやトークイベントなどを実施します。古くから人々の生活を支えてきた川の源となる山々に目を向け、そこに息づく動植物や人々の営みの時間が積み重なる景色に触れることで、いつもの風景が異なるものに見えてくるきっかけとなることを目指します。



左) 参考図版 永沢碧衣《村景》2019年  
©かみこあにプロジェクト(秋田)



右) 参考図版 狩野哲郎 《1本で複数の木》2021年 Courtesy of the artist photo: Ken KATO

## 各館の展覧会・プロジェクト | 八戸市美術館

## エンジョイ！アートファーム！！

会期	2024年4月13日(土) - 9月1日(日)
会場	八戸市美術館 ジャイアントルーム
開館時間	10:00~19:00
休み	火曜日(祝日の場合は翌日)
参加作家	磯島未来、漆畑幸男、しばやまいぬ、蜂屋雄士、東方悠平
会場構成	佐藤慎也



5人のアーティストたち  
(左から磯島、東方、漆畑、しばやまいぬ、蜂屋)

八戸市美術館のコンセプト「出会いと学びのアートファーム」を体現する企画を実施します。展覧会やプロジェクト、コミュニケーションを種として、そこに訪れた人々が得る出会いや学びが栄養となり、それぞれの感性や創造力が育まれる。美術館は、その畑(ファーム)として、多様な活動の土壌となり、まちの未来を創造していきます。そんな美術館を象徴する空間「ジャイアントルーム」で、八戸を拠点に活動する5人のアーティストが、来館者と共につくり、楽しむプロジェクトを展開していきます。作品を鑑賞したり、絵を描いたり、トークプログラムに参加してみたり、ジャイアントルームに滞在するアーティストと交流したり……。絵画や版画、写真、ダンスなど、多様なジャンルで日々繰り広げられる活動により、来館者とアーティストがこの場で出会い、関わり合うことで、まるで畑に蒔いた種のようにどんどん育っていくことを期待しています。

訪れるたびに变化するジャイアントルームのあり方は、訪れる人によって使い方が決められていく「はらっぱ」のような場でもあります。

「はらっぱ」でもあり、「ファーム」でもあるこのジャイアントルームで、様々な作品や活動、そしてアーティストとの出会いをお楽しみいただけます。



東方悠平 《TENGUBUCKS Cafe in Hue - Coffee Float》  
2019年



しばやまいぬ 《疾風少女2》  
2018年

## 各館の展覧会・プロジェクト | 十和田市現代美術館

## 野良になる

会期 2024年4月13日(土) - 11月17日(日)  
 会場 十和田市現代美術館  
 開館時間 9:00~17:00 (入館は16:30まで)  
 休み 月曜日 (祝日の場合は翌火曜日)  
 参加作家 丹羽海子、墓原蓉子、永田康祐、アナイス・カレニン

「野良になる」展は、本アートフェスのテーマである「はらっぱ」を自然と人間の交わる場所と捉え、それらの複雑に絡まる関係性に注目した展覧会です。

近年、世界規模で気候変動への危機感が高まり、人間の自然に対する関係を再考することが求められています。しかし現在私たちが知るこうした「人間」のあり方そのものが、自然を管理すべき他者として収奪してきたものであるならば、そのおなじ「人間」が自然を救うことができるのでしょうか。本展では近代が生み出した自律した理性的な主体としての「人間」を見直し、その成立過程で排除された存在や思考に目を向けます。私たちの思考を規定するさまざまな二項対立的な枠組みの境界を攪乱しつつ強かに――野生でも飼われるのでもなく野良のように――息づくあり方、物語に出会うことになるでしょう。

日本とアメリカにルーツを持ち、トランスジェンダー女性として生きるあり方を彫刻で表現する丹羽海子、10歳の頃に学校を離れ、研ぎ澄まされた独学の感性で風景を描く墓原蓉子、品種改良や養殖といった人間のコントロールと動植物の生が交錯する関係を取り上げ、映像や料理の作品を作る永田康祐、ブラジルに植民地時代以前から伝わる知識をもとに、植物と人間の関係性を問い直す作品を制作するアナイス・カレニンなど、多様な視点から自然を捉えるアーティストの表現を紹介します。

国内外の若手作家の新作を中心に、彫刻、映像、ウールのタペストリー、サウンド、屋外インスタレーション、料理など、多岐にわたる表現形式で現代アートを楽しめる展覧会です。



参考図版 丹羽海子  
 《Metropolis Series: Good Egg Community》2022年  
 Courtesy the artist and Someday, New York  
 撮影：Daniel Terna



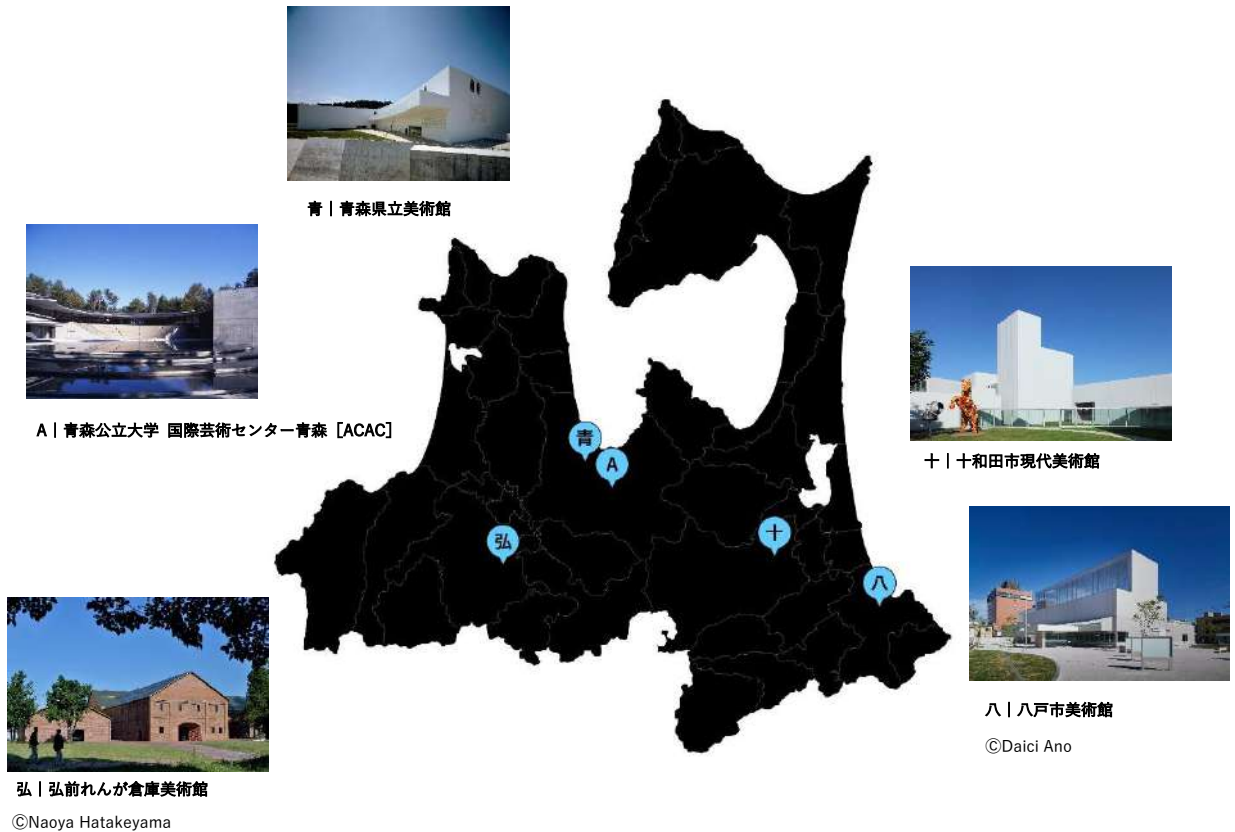
参考図版 墓原蓉子《それじゃわからない》2022年  
 ©Yoko Daihara, courtesy of Take Ninagawa, Tokyo.  
 撮影：岡野圭



参考図版 永田康祐 《Purée》2020年



## 青森県について



青 | 青森県立美術館



A | 青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]



十 | 十和田市現代美術館



弘 | 弘前れんが倉庫美術館

©Naoya Hatakeyama



八 | 八戸市美術館

©Daici Ano

青森県は本州の最北端にあり、突き出た津軽半島とそれに対峙するように北に伸びたマサカリ形の下北半島という特徴的な地形です。西に日本海、北に津軽海峡、東に太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は本州一長い約740kmに及んでいます。歴史・風土的に津軽、南部、下北と大きく3つに分けられています。

その昔、青森県を含む東北は陸奥国（むつのくに）と呼ばれており、当時の幕府から見て”陸の奥”とされていました。しかし近年、発掘された青森市に所在する三内丸山遺跡の全容が次第に明らかになるにつれ、縄文時代には日本でも有数の文化が発達していたことが判明。世界遺産や文化財に登録された遺跡群も多く、長い歴史を持つ土地でもあります。

AOMORI GOKAN アートフェス 2024 が開催される4月から8月の期間、青森は最も活気がある季節を迎えます。春には桜が一斉に咲いた後、リンゴの花が開き、各所で祭りがはじまります。春を呼ぶ豊作祈の願祭である「えんぶり」を皮切りに、夕祭りの灯籠流しの変形であろうといわれる「青森ねぶた祭」、津軽の夏を彩る「弘前ねぶたまつり」など、国内外から多くの人々が訪れ賑わいをみせます。



## エリア紹介 | 青森市 弘前市 八戸市 十和田市

5つの美術館・アートセンターがある4つの市は、いずれも豊かな文化と自然に恵まれ、それぞれの場所に伝わる祭りや暮らしの手仕事、食など独自の魅力に溢れています。アート体験と共に、地域の新たな魅力を再発見いただく機会となります。

### 青森市



ねぶたの家W・ラッセ(外観)

青森市は、青森県のほぼ中央に位置する県庁所在地で、北東北における交通・行政・経済・文化の拠点都市です。江戸時代より本州と北海道を繋ぐ交通と物流の要衝として発展したまちで、旅の玄関口となる新幹線新青森駅、青森空港、青森港、東北自動車道などを有する陸・海・空の交通結節点として高い拠点機能を有しています。穏やかな陸奥湾と八甲田連峰の雄大な山々に囲まれている青森市は、四季折々の景観、りんご、カシス、ホタテやナマコなどの豊富な食材に恵まれています。また、日本を代表する火祭りの「青森ねぶた祭」や世界遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」を代表する特別史跡「三内丸山遺跡」、国指定史跡「小牧野遺跡」などの貴重な文化や歴史にも触れることができる魅力的な観光資源を多く有しています。

### 弘前市



弘前城、岩木山と桜

弘前市は、青森県の南西部に位置する、弘前藩の城下町として発展したまちです。市内には東日本唯一の現存天守である「弘前城」をはじめ、寺院街や武家屋敷など藩政時代の趣を残す街並み、明治・大正期の洋風建築、日本のモダニズム建築を代表する建築家「前川國男」の近代建築など、歴史的文化財・建造物が数多く残っています。また平成30年に100周年を迎えた「弘前さくらまつり」や、重要無形民俗文化財に指定されている「弘前ねぶたまつり」、その他にも「弘前城菊と紅葉まつり」、「弘前城雪燈籠まつり」と、季節ごとに開催されるまつりには、毎年多くの観光客が訪れています。農業も盛んで、特にりんごの生産量は日本一を誇ります。その他、「津軽塗」「こぎん刺し」「津軽打刃物」など藩政時代より受け継がれてきた伝統工芸品も多く、平成29年には「津軽塗」の漆器製作技術が青森県で初めて国重要無形文化財に指定されています。

### 八戸市



八戸三社大祭

八戸市は、太平洋を一望できる青森県の南東部に位置し、全国屈指の水産都市、北東北有数の工業都市として発展を遂げてきました。また、古くから市民の文化芸術活動が盛んで、歴史・文化、アート、音楽など多彩な活動が繰り広げられています。市街地からほど近い場所に位置する「種差海岸」は、太平洋に広がる大海原や砂浜、波打ち際まで広がる天然芝生地などの風光明媚な景観が見どころです。豊かな海と冷涼な気候が生んだ八戸の食文化は、「八戸前沖さば」をはじめ、日本一の水揚げを誇るイカ、〈B-1 グランプリ〉でゴールドグランプリに輝いた「八戸せんべい汁」など、食の魅力が満載です。ユネスコ無形文化遺産「八戸三社大祭」や国重要無形民俗文化財「八戸えんぶり」、世界遺産登録の「是川石器時代遺跡」などの歴史や文化など、豊富な資源にあふれています。

### 十和田市



奥入瀬溪流 阿修羅の流れ周辺

十和田市は、青森県の県南地方内陸部に位置し、青森市・弘前市・八戸市からもアクセスができるほか、秋田県や岩手県からアクセスも便利な場所にあります。国立公園である「十和田八幡平国立公園」をはじめ、国の特別名勝及び天然記念物に指定されている「十和田湖」および「奥入瀬溪流」などの大自然があり、春夏秋冬の自然を間近に体感でき、毎年国内外から多くの観光客が訪れています。市街地には、日本の道・100選に選ばれた官庁街通りがあり、通り沿いには、国内外で活躍するアーティストの作品を多数展示しています。また、疎水百選にも選ばれた人工河川の「稻生川」が、十和田市東部の「三本木原台地」を東西に流れて、地域に豊かな実りをもたらしています。

## ロゴマーク



### “5館が五感を刺激する”フェス

野間真吾 <アートディレクター / デザイナー> メッセージ

5館の“5”と五感（Five Senses）の“S”をモチーフにした、AOMORI GOKANのシンボルマークが、フェス開催のフェーズにさしかかりさらなる進化を遂げました。

かど  
角に GOKAN シンボルの遺伝子を受け継ぐロゴタイプが新しく加わり、そして青森の風景や空気感を取り込んでみようという試みから、青森ヒバ材の断面をそのままマークにうつしとりました。こうして、いちど青森の自然に委ねたフェスのための新しいシンボルマークが誕生したのです。マークから少しでも“青森の気配”を感じていただくことで、より多くの方々がきっと青森のフェスに足を運んでみたくなる、そんなきっかけにつながることを期待しています。

#### 野間真吾

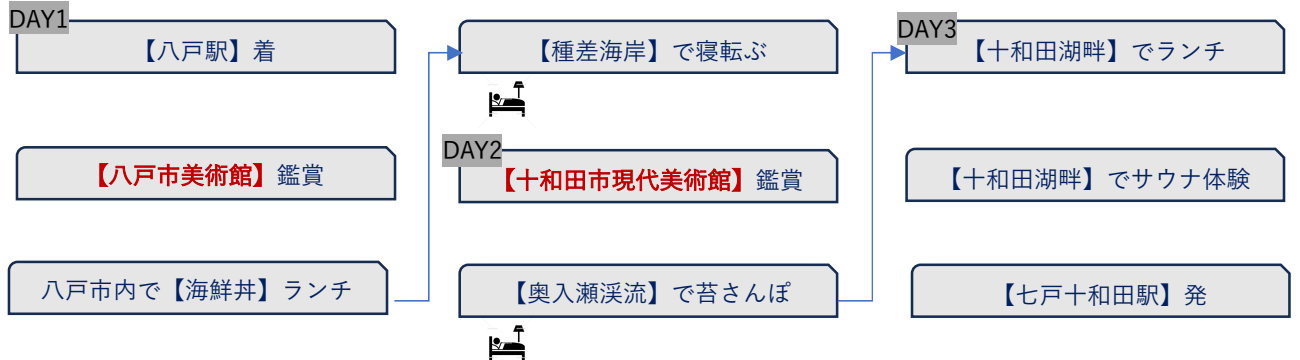
大阪府生まれ。ロンドン芸術大学（London College of Communication MA Graphic Design）修士課程卒。国内外のデザイン会社を経たのち、2008年株式会社佐藤卓デザイン事務所入社。2017年にデザインオフィス NOMA Inc.設立。ISSEY MIYAKE KYOTO | KURA のアートディレクターを務める。

東京 ADC 賞 2020—2021、JAGDA 賞 2020、東京 ADC 賞 2019 など受賞。2022 毎日デザイン賞ノミネート、Dezeen Award 2020（Interior Large Retail 部門）Short listed。

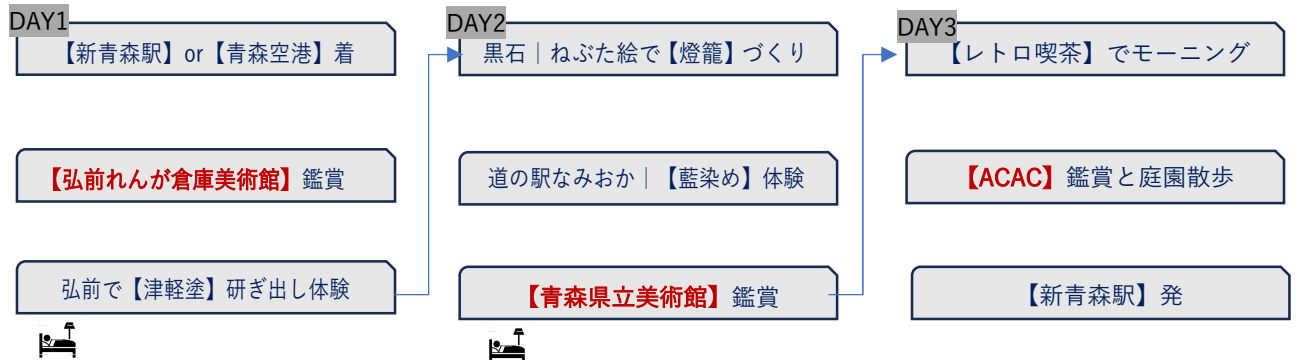
## 本フェスが提案する周遊コース（イメージ）

青森県の豊かな自然、伝統文化を5つの美術館・アートセンターを中心に体験できる周遊コースを提案します。公共交通機関で巡るコースや「自然」「工芸」をテーマにしたコースなど、詳細はガイドブックで案内するほか、今後ウェブサイトでも新しいテーマの周遊企画を提案します。さらに美術館から出て、展示テーマをより深く楽しんでいただくため、周辺の文化施設や自然を巡る鑑賞ツアー、学芸員によるガイドなど実施予定です。

### ●アート×自然 「公共交通機関と徒歩でめぐる 八戸、十和田の2泊3日プラン」(概要)



### ●アート×工芸体験 「車でめぐる弘前、青森2泊3日プラン」(概要)



## 検索機能が充実した公式ウェブサイト

公式ウェブサイトでは、青森県内を便利に楽しく周遊できる機能を充実させています。エリア、テーマ別の検索をはじめ、交通ルート、周遊先の詳細情報も掲載。\*2024年2月にアップ予定



▼エリアから探す



▼開催中の展覧会を探す



▼周遊ルート

## 関連情報

### ・ガイドブック



(イメージ)

AOMORI GOKAN アートフェス 2024 では公式のガイドブックを作成します。フェスの開催情報とあわせて各エリアのお勧めスポットを紹介するほか、「自然」「建築」「工芸」などのテーマ別、公共交通機関で巡る 5 館周遊など、モデルコースも充実しています。フェスのガイドブックとしてだけでなく、青森アート旅に長く使える充実した 1 冊となります。

価格：	1,200 円（税込）＊予価
販売先：	各美術館のミュージアムショップ、青森県内外の書店（予定）
体裁：	A5 サイズ／全 108 ページ／フルカラー
企画：	株式会社ヴィークル
編集：	栗本千尋
アートディレクション：	野間真吾（NOMA.inc）
DTP・地図制作：	イマイタカヒロ（Inazuma Graphics）、藤井渉（8graph.）
発行：	有限会社グラフ青森

### ・開催記念 シンポジウム

各館の企画と連動しながら、5 館が連携し 1 ヶ月に 1 回程度「共通プログラム」としてシンポジウムやライブパフォーマンスを行います。国内外のアーティストらと協働して、——人間、動物、植物などの訪問者たちが関係する境界上に位置する場である「はらっぱ」としての美術館・アートセンターの持つ潜在力、そこで生まれるケアをはじめとした営みの創造性について思索を深めると共に、5 館の連携を強化し、この青森という土地から現代アートの可能性を発信していきます。

<開催概要>

- ・名称： AOMORI GOKAN アートフェス 2024 国際シンポジウム（仮）
- ・会場： 青森県立美術館 ＊オンラインでも配信予定
- ・内容： 2024 年 4 月のアートフェスの開始時期に合わせ、2 日間に分けて開催  
＊日程、詳細は後日公式ウェブサイトで発表します



## 開催概要

タイトル	AOMORI GOKAN アートフェス 2024 ※英語表記 AOMORI GOKAN Arts Fest 2024
テーマ	つらなりのはらっぱ
会期	2024年4月13日(土) — 9月1日(日)
会場および展覧会・プロジェクト名	<ul style="list-style-type: none"><li>青森県立美術館：かさなりとまじわり</li><li>青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC]： currents / undercurrents -いま、めくるめく流れは出会って</li><li>弘前れんが倉庫美術館： 蜷川実花展 with EiM：儚なくも煌めく境界 弘前エクステンジ#06「白神観見考しらかみのぞきみこう」</li><li>八戸市美術館：エンジョイ！アートファーム！！</li><li>十和田市現代美術館：野良になる</li></ul> *この他県内各地での連携企画を予定しております。
主催	AOMORI GOKAN アートフェス 2024 実行委員会 [青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館、青森県、青森市、弘前市、八戸市、十和田市、(公社)青森県観光国際交流機構]
実行委員長	青森県立美術館 館長 杉本康雄
企画	<ul style="list-style-type: none"><li>青森県立美術館 池田亨、工藤健志、菅野晶、板倉容子、高橋しげみ、奥脇嵩大</li><li>青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC] 慶野結香</li><li>弘前れんが倉庫美術館 木村絵理子、佐々木蓉子、宮本ふみ</li><li>八戸市美術館 大澤苑美、高橋麻衣、平井真里</li><li>十和田市現代美術館 外山有菜</li></ul>
WEB	<a href="https://aomori-artsfest.com">https://aomori-artsfest.com</a>
SNS	<ul style="list-style-type: none"><li>・ X (旧 Twitter) @aomori_artsfest</li><li>・ Instagram @aomori_artsfest</li><li>・ facebook @aomori_artsfest</li><li>・ ハッシュタグ #aomori_artsfest</li></ul>

## 【参考資料】

## 青森県立美術館

| 建築家：青木淳

隣接する三内丸山遺跡の発掘現場から着想を得た、トレンチ（壕）とホワイトキューブからなる建築が独創的。シャガールのバレエ「アレコ」舞台背景画のほか、奈良美智、棟方志功、成田亨など郷土作家の作品を展示。日本画や洋画、現代アートまで幅広いコレクションと演劇・音楽など舞台芸術への取り組みにより、豊かな芸術の魅力を発信している。

→<https://www.aomori-museum.jp/>

## 青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]

| 建築家：安藤忠雄

周囲の豊かな自然環境を生かし、建物を森に埋没させる「見えない建築」をテーマとした建築が特徴的。アーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）を中心に、ジャンルに捕らわれない展覧会、トーク、ワークショップなどを開催している。春から秋にかけては敷地内の森の散策や、20 数点を数える野外彫刻の鑑賞も楽しむことができる。

→<https://acac-aomori.jp/>

## 弘前れんが倉庫美術館

| 建築家：田根剛

約 100 年前に酒造工場として建てられた煉瓦倉庫を改修した美術館。「記憶の継承」をコンセプトに、建物本来の姿を残してリノベーションを行った。建築や地域に根差したコミッション・ワークを重視し、奈良美智、ジャン＝ミシェル・オトニエルの作品をはじめ弘前ならではのコレクションを形成。黒いコルタールの展示壁など空間の特性を生かした現代アートの展覧会を開催している。

→<https://www.hirosaki-moca.jp/>

## 八戸市美術館

| 建築家：西澤徹夫、浅子佳英、森純平

様々な活動を支える巨大な空間「ジャイアントルーム」を取り囲むように、展示室などの専門性の高い個室群が配置されている。〈種を蒔き、人を育み、100 年後の八戸を創造する美術館～出会いと学びのアートファーム～〉をテーマとし、八戸の美や文化を伝える収蔵作品を様々な切り口で紹介する展示や、幅広いジャンルの企画展、プロジェクトを展開している。

→<https://hachinohe-art-museum.jp/>

## 十和田市現代美術館

| 建築家：西沢立衛

人間と自然をテーマに、草間彌生、奈良美智、ロン・ミュエクなど世界で活躍するアーティストらの作品を常設展示。展示室 1 部屋に 1 作品を展示することで、作品の中に入り込むような鑑賞体験ができる。大小様々な展示室がガラスの通路でつながれており、アートの家を訪ね歩くような構造が特徴的。館内だけでなく、周辺のアート広場や商店街にも作品が点在し、まち全体でアートを楽しむことができる。

→<https://towadaartcenter.com/>

©Naoya Hatakeyama

©Daici Ano

